Bulletin of the Faculty of Education,
Nagoya University (Educational Psychology)
1986, Vol. 33, 157-172.

保育活動に対する母親の期待*

——「個人レベルの指導論（ＰＴＴ）」の拡張——

梶田正巳　後藤宗理[1)]　吉田直子[2)]

Ⅰ 問　題

保育園や幼稚園での保育活動がどうあるべきかという問題は，これまで，保育所保育指針や幼稚園教育要領と関係づけられながら，さまざまなレベルで議論されてきた。こうした討論の優れたまとめは，竹内（1981）に詳しく紹介されている。例えば，保育内容の一つとしての文字指導のあり方をめぐって論議がなされたり，指導方法である自由保育についていろいろな意見が交換されたことはよく知られている。

こうした幼児教育への関心は，単に幼児教育研究者や実践家だけに限られたわけではない。実際，この10年余りの期間をとってみると，これまでの大学受験生を主として教育の対象としてきた予備校が，幼児教育に強い関心を示し始めている。そして，ユニークな教育方針を立てて幼稚園を経営し，幼児の保育活動のあり方をめぐって一石を投じている。また，国際的にも日本の幼児教育が注目されたり，帰国子女の海外における教育体験が持ち込まれたりして，マクロな視点からも保育活動が捉えられるようになってきた。こうした状況は，幼児教育を考える上で，大きな広がりを生み出している。

しかし，幼児教育を考える時，忘れてはならないのは，わが子を保育園や幼稚園に通わせている両親，とりわけ母親の観点ではないだろうか。今更言うまでもないことであるが，母親にとっては，幼児教育は他人ごとではない身近な問題である。それは学問的な理論や抽象的概念であるよりも，まさしく具体的な日常の指導ないしはしつけをどうしたらよいか，という問題なのである。つまり，どの母親もわが子をどう指導したらよいのかその問題解決に当たっている。

こうして母親は，わが子という特別な対象を媒介として，幼児教育に対して鋭い＜ものの見方や考え方＞を有するようになっていく。こうした母親の見方・考え方あるいは保育への期待は，感情的にも密接に子どもと結びついているだけに，それだけ強いものがあるのではないだろうか。また，母親は，通常，父親よりも幼稚園や保育園の教師と日常的にかかわることが多い。例えば，毎日，子どもの送り迎えによって，教師と顔を合わせるし，子どもの状況について教師とたえずやりとりしている。こうした接触を通して，母親は幼稚園や保育園がどう保育活動を考えているかを理解するだろうし，またいかにあるべきかについて多様に反応しているのではないだろうか。こうした理解や反応は，明らかに母親自身の持つ＜ものの見方・考え方＞と深いつながりを有する。以上で述べた問題は，幼児教育には重要な研究課題であるにもかかわらず，必ずしも解き明かされているわけではない。つまり，母親の＜見方・考え方＞の構造は，十分に解き明かされていない。そこで本研究は，著者らがこれまで行ってきた保育者の「個人レベルの指導論（PTT）」という概念を拡張として適用することにしたい（梶田・後藤・吉田，1985）。

ここで，幼児教育に多様性を生みだしてきた背景を簡単に整理してみることにしよう。一つは，教育学者や教育心理学者，さらには幼児教育の実践家によるいろいろな理論の提唱があげられる。フレーベル，モンテッソリー，ピアジェ，シュタイナー，倉橋惣三などの見解は，現場の保育者の実践のよりどころとなっていることは明らかだろう。とりわけ，幼児教育の場合，保育者の宗教観や教育観，広くはその価値観が大きくものをいうことがあり，これが多様性に相乗効果を生んでいるかも知れない。

第二は社会的要因が考えられる。わが国は，昭和30年代を境にして，急速な都市化の波にみまわれ，大きな保育環境の変化を生んだ。また，国民全般が意識の上では

---

*　本研究のデータ処理は，名古屋大学大型計算機センターのFACOM M－382により行われた。

1）名古屋市立保育短期大学助教授
2）稲沢女子短期大学助教授

中産階級化したり，核家族化の進行や出生率の著しい低下現象が起きたりした。さらには，都市化現象が社会的問題行動の低年齢化を誘発している。こうした社会的状況の変化は，親の教育に対する見方を変えさせたり，直接的には保育行政のあり方にも波及した（粂他，1985）。

上記の問題と関連して，幼稚園や保育園は敏感に社会的状況の変化に反応しており，実際，学校教育にはないバラエティーが生まれている。例えば，夜勤める人の子どもを預かる夜間の保育園，あるいは自動車学校に付属する保育園など，人々の生活や就業様式の変化を敏感に反映して，続々といろいろな保育園や幼稚園が誕生している。こうした状況は，保育活動をよきにつけ，あしきにつけ多様化させている。以上三つの問題を指摘したが，それらはいずれもマクロな要因として，人々の保育に対する＜見方・考え方＞を左右するものだろう。

ところで，本研究は，「個人レベルの指導論（PTT）」という概念を使って，母親の保育に対する＜見方・考え方＞を検討しようとするものである。ここでは主として，母親が保育活動に何を＜期待＞しているのか，に迫る。こうした期待について考える時，「個人レベルの指導論（PTT）」とは異なる表現であるが，＜・・観＞と表される＜児童観＞，＜教育観＞，＜発達観＞についても触れなければならないだろう。母親は，わが子について，教育，保育，発達への期待を持ち，それを実現したいと願っている。それらは極めて個別的なものであるが，しかしより一般的に＜児童観＞，＜教育観＞，＜発達観＞というような“価値観”として捉え，研究することが可能である（東・他，1981）。しかし，著者らは，＜・・観＞ではなく，＜・・論＞として主題に迫りたいと考える。というのは，別稿でも述べたが，＜・・論＞と表記することによって，例えば，幼児教育のアカデミックな理論と一人ひとりの人間の有するパーソナル・セオリー，すなわち「個人レベルの＜・・論＞」とが対比されるからである（梶田，1986）。本研究に限れば，保育を指導と置き換えることにより，「個人レベルの指導論（PTT）」として，母親の保育への期待に迫ろうとするものである。

次に，最近公刊された関連研究について言及しておきたい。粂他（1985，1986）は，愛知県下の公立・私立の保育園，幼稚園へ子どもを通わせている1485名の母親と968名の保育者，それに全国の保母養成機関の教員202名，を対象に保育者の資質について種々の角度から調査した。その中に９項目の保育観の調査がある。項目は例えば，「つねに新しい保育を試みる――これまでの保育を尊重する」，「知的側面を伸ばすように心がける――感性的側面を伸ばすように心がける」のような対照項目である。こうした項目の構成は，梶田・後藤・吉田（1985）と基本的に同じである。研究成果として興味深いのは，

１）＜保育者中心――子ども中心＞では公立保育園と大学教員がその他のグループよりより子ども中心である。

２）＜全面発達――個別発達＞では，母親を除く公立・私立の保母・大学教員がより全面発達に目を向ける。

３）＜知的発達――感性発達＞では，どのグループも感性発達を支持する。

４）＜生活習慣――活動意欲＞では，私立保育園の保母と母親がより強く生活習慣の形成を求める。

５）＜集団尊重――個性尊重＞では，母親が集団尊重を支持する。

６）＜新しい経験――安全確保＞では，公立保育園の保母と大学教員が新しい経験を求める傾向が現れた。

ここで興味深いのは，保育活動に対する見方が，母親とその他のグループではかなり異なることであろう。これは詳しく追究すべき課題である。それに，この研究の調査項目は，記述の水準において抽象度が高く，日常の保育活動から見るともっと具体的に問われることが望ましいといえるだろう。著者らは（1985），先に保育者の指導行動を一人ひとりの指導のプロフィールを描くという方法論をつかって，上記の問題に迫ってきた。この研究では，抽出された４つの尺度の上に，保母の「個人レベルの指導論（PTT）」をプロフィールとして表した。そこで本研究では，先の研究の拡張として，同じ尺度を母親に適用した場合，保育園や幼稚園の保育活動に対する期待のプロフィールがこの尺度上にどのように表されるかを検討するものである。これは先の粂らの研究から示唆された課題をさらに具体的に究明することにならないだろうか。このように考え，既に保育者を対象に行った質問項目に回答を求めることによって，母親の保育活動に対する期待の構造を，保育者と対比させながら明らかにすることにしたい。

Ⅱ　方　　法

１．被調査者と調査実施時期

被調査者は，保育園と幼稚園に通園する園児の母親で，名古屋市内の公立保育園５園299名（18.0％），公立幼稚園２園452名（27.9％），私立保育園２園413名（25.5％），私立幼稚園４園454名（28.0％）の計1618名である。子どもの在籍クラスは３～５歳児に限定した。園別の被調査者数を表１に示した。これら13園のうち，Ａ－４，Ａ－５，Ｄ－４を除く10園は梶田他（1985）の調査において，保育者調査の対象となっている。

質問紙調査は1985年７月上旬に実施され，各園の担任

表1　園別にみた被調査者数

種　別	園 名	人 数	%
公立保育園	A－1	76	4.2
	A－2	52	3.2
	A－3	54	3.3
	A－4	61	3.8
	A－5	56	3.5
公立幼稚園	B－1	204	12.6
	B－2	248	15.3
私立保育園	C－1	83	5.1
	C－2	330	20.4
私立幼稚園	D－1	138	8.5
	D－2	65	4.0
	D－3	115	7.1
	D－4	136	8.4
全　体		1618	100.0

を通じて調査票の配布と回収が行われた。調査は，すべて無記名で行われた。

なお，被調査者の年齢別内訳は，20代311名（19.2%）30代1254名（77.5%），40代52名（3.2%）となっている。

2．質問紙の内容

梶田他（1985）によって作成された，日常の保育場面でみられる実際の指導のしかたについての質問紙を参考にして，母親が保育園や幼稚園での日常の保育活動に何を期待するかを明らかにするための質問紙が作成された。梶田らの作成したPTTの構造を明らかにする質問紙は51対の項目からなっているが，われわれは，母親の期待を明らかにする目的に適合しているかどうかという視点から51対の質問項目の内容を吟味し，45組の対項目からなる質問紙を作成した。そして，自分の子どもをどのように指導してほしいかという観点から回答を求めた。したがって，質問項目はすべて，「……指導してほしい」という表現にした。

調査に用いられた質問項目の例は表3に示したとおりである。また，質問紙は論文末尾に掲げた。

本研究では，園での指導として母親が対項目のどちらの項目内容を期待するかを6点尺度（Aと同じ，Aにかなり近い，Aに少し近い，Bに少し近い，Bにかなり近い，Bと同じ）で評定するよう求められた。そして，すべての評定に対して，1点（Aと同じ）から6点（Bと同じ）が与えられた。

Ⅲ　結果と考察

1．項目別にみた母親の期待と保育者のＰＴＴとの平均値の比較

はじめに，項目別の得点をそれぞれ保育者の調査結果（梶田他，1985）と比較してみよう。表2－1，表2－2は，前回の保育者に対する調査項目と，それに対応する保育者と母親の項目別平均値，および両者の差を示している。

表2－1は，母親の方が得点が高く，保育者よりも項目のBの意見に相対的に近い項目群である。表から明らかなように，項目番号*33，2，44，3，6，9，50，7，24，41，29，39，10，17の14項目においてその差は有意であった（t－検定）。

表2－2は，保育者の方が得点が高く，母親よりも相対的にBの意見に近い項目群である。表から明らかなように，項目番号31，26，8，28，19，42，51，12，36，37，18，46，43，1，45，22，38，13，47，11，35の21の項目においてその差は有意であった。

このように項目別平均値を比較してみると母親と保育者には，指導に対する意見の違いがあることが示唆されるが，表2の分析では，その違いを構造的に捉えるに至っていない。

しかし，いくつかの興味深い結果が指摘されよう。

まず，表2－1を見ると，母親の方がより強く支持する意見として，

- 基本的生活習慣は個人差よりも平均年齢に合わせる
- ケガを恐れず積極的に活動させる
- 危険を恐れず冒険させる
- おやつを残さず食べさせる

などが目立ち，生活面の逞しさを育ててほしいと期待する気持を伺わせる。一方，

- 学習は子どもの意欲に合わせる
- のびのびと活動させる

などの意見へも保育者より支持が強く，母親が子どもの自発性を尊重する指導を期待する傾向も見受けられる。

表2－2では母親は相対的にAの意見に近いといえるが，ここでも，母親は，

- 異年齢の交流をさせてほしい
- 仲よく助け合う

*　表2の項目は，保育者を対象とした調査（梶田他，1985）で用いたものであるので，項目番号は今回の調査とは異なるが内容は同一である。

表2－1　母親と保育者の項目別得点の平均値とその差（母親の方が高い場合）

No.	項目（Aの意見）	（Bの意見）	保育者（395） M	保育者（395） (S・D)	母親（1618） M	母親（1618） (S・D)	差
33	基本的生活習慣は習得の個人差を配慮し，それぞれの子供に合わせて指導する	基本的生活習慣は，年齢による平均的な習得の傾向に合わせて指導する	2.71	1.41	4.48	1.51	−1.77**
2	ケガのないよう子供の身体の安全を第一に指導する	ケガを恐れず子供が積極的に活動するように指導する	3.47	1.34	4.66	1.30	−1.19**
44	失敗は意欲をおとすので成功するように指導する	失敗を経験させそれに耐えさせたり，恐れさせないように指導する	4.60	1.05	5.29	0.94	−0.69**
3	子供の環境（例，遊具，遊び場など）は安全を中心に設定する	危険を恐れず子供には魅力的で，冒険のできる環境を設定する	2.86	1.24	3.49	1.57	−0.63**
6	子供には母親のように指導する	子供には父親のように指導する	2.64	0.90	3.16	1.15	−0.52**
9	時と場合によって，柔軟に指導の計画をかえる	いったん決めたら一貫して指導の計画を実行する	1.81	0.92	2.22	1.25	−0.41**
50	食事やおやつでは一人一人の子供の好みやペースを大切に指導する	食事やおやつではクラスが同じペースで残さず，きちんと食べるように指導する	4.15	1.28	4.51	1.44	−0.36**
7	数の学習を積極的にすすめる	数の学習は子供の自然な意欲にまかせる	4.41	1.30	4.76	1.47	−0.35**
24	まず子供が基本的な生活習慣をしっかりと身につけるように指導する	基本的生活習慣のしつけよりも，まず子供がのびのびと活動するように指導する	2.53	1.31	2.86	1.58	−0.33**
41	子供が言うことを聞かない時は，体罰も時には辞さないで指導する	子供が言うことを聞かなくても，納得するまで言葉で説明する	3.39	1.23	3.71	1.60	−0.32**
29	保育についての自分の見方，感じ方，考え方にそって指導する	所属する園や研究団体の考え方，見方に合わせて指導する	3.33	1.21	3.62	1.38	−0.29**
39	造形では良い作品が出来あがるように指導する	造形では作品よりも活動を楽しくするよう心がける	5.04	1.00	5.30	0.88	−0.26**
10	子供の短所よりも，長所をより伸ばすように指導する	子供の長所よりも，まず短所を克服するように指導する	2.35	1.14	2.49	1.53	−0.14*
17	子供が一生懸命やることよりも，うまくやることを重んずる	子供がうまくやることよりも，一生懸命やることを重んずる	5.56	0.75	5.70	0.65	−0.14**
21	それぞれの子供の家庭のしつけの仕方に合わせて指導する	家庭よりも園や教師の指導の方針にそってしつけをする	4.27	1.00	4.38	1.15	−0.11
16	文字や言葉の学習を積極的にすすめる	文字や言葉の学習は子供の自然な意欲にまかせる	4.40	1.29	4.49	1.56	−0.09

30	鉄棒，マットなどの運動がうまくできるように指導する	鉄棒，マットなどの運動では，その活動に興味を持つように指導する	4.55	1.36	4.63	1.50	−0.08
15	一人一人の子供のペースよりもクラスのまとまりを大切にする	クラスのまとまりよりも一人一人の子供のペースを大切にする	3.61	1.12	3.67	1.44	−0.06
32	ケンカが起きた時は子供に解決をまかせる	ケンカが起きた時は教師が直ちに入って解決する	2.91	1.13	2.93	1.34	−0.02

（注）表中 *，** はそれぞれ P＜.05，P＜.01の有意性を示している。

表2－2　母親と保育者の項目別得点の平均値とその差（保育者の方が高い場合）

No.	項目（Aの意見）	（Bの意見）	保育者（395） M	保育者（395） (S・D)	母親（1618） M	母親（1618） (S・D)	差
31	子供どおしで遊ばせ，教師は見守るようにつとめる	教師も子供の中に入って一緒に遊ぶ	4.36	1.39	2.86	1.55	1.50**
26	間違った行動を直すには，その理由を言葉で子供にわかるまで説明する	間違った行動を直すには，言葉で説明するよりもその場で直ちに叱る	2.86	1.39	2.15	1.32	0.71**
8	困難な時でも，子供が最後までねばり強くやりとげるように静かに見守る	困難な時は，早く，うまくやりとげるように積極的に援助する	2.33	1.07	1.70	1.02	0.63**
28	異なる年齢の子供の交流を大切にする	同じ年齢の子供の交流を大切にする	3.32	1.28	2.71	1.45	0.61**
19	子供が互いに仲よく，助け合うように指導する	子供が自分の気持ちや要求を率直につらぬくように指導する	2.24	1.13	1.66	1.03	0.58**
42	子供の保育には積極的に父母の意見を取り入れ指導する	子供の保育では園や教師の指導方針を積極的に父母に伝える	4.30	1.02	3.73	1.42	0.57**
51	子供自身が遊びを考えたり，ルールを作ったりして遊ぶよう見守る	スムーズに遊べるよう教師がルールを作ったり，考えたりして方向づける	2.89	1.34	2.33	1.34	0.56**
12	造形などでは課題の大枠だけを決め，後は子供の自発的活動にまかせる	造形などでは，初めに教師がきめこまかく計画し，それにそって指導する	2.56	1.16	2.08	1.17	0.48**

36	思いやり，やさしさ，などを身に付けさせるよう指導する	たくましさ，積極性，などを身に付けさせるように指導する	3.00	1.12	2.60	1.50	0.40 **
37	子供の協調性を育てる	子供の自立性，独立性を育てる	3.43	1.19	3.06	1.49	0.37 **
18	造形では，子供の生みだす発想やイメージを第一に指導する	造形では，教師の意図した考え方やイメージを第一に指導する	1.83	0.95	1.49	0.77	0.34 **
46	運動，身の周り事，普段の活動等では子供の性別に合った指導をする	運動，身の周り事，普段の活動等では子供の性別にこだわりなく指導する	4.74	1.27	4.40	1.58	0.34 **
43	子供には教師としていつも変わらぬ態度で指導する	教師も一人の人間として，率直に自分の気持ちに従い指導する	3.17	1.35	2.86	1.57	0.31 **
1	ワークブックやドリルを使って指導する	子供の園における日常の生活体験を通して指導する	5.31	1.13	5.03	1.13	0.28 **
45	園の行事の準備には，父母の参加を積極的に求める	園の行事の準備はすべて教師の力だけで行う	3.19	1.43	2.91	1.24	0.28 **
22	男の子らしさ，女の子らしさを伸ばすように指導する	男の子も女の子も等しく指導する	4.13	1.36	3.88	1.74	0.25 **
38	男の子らしい遊び，女の子らしい遊びをさせるよう心がける	性別にこだわらずどんな遊びもさせるよう心がける	5.14	0.94	4.91	1.22	0.23 **
13	多くの場面ですべての子供が同じ経験や活動をするように指導する	多くの場面でそれぞれの子供が個性に応じた経験や活動をするように指導する	3.66	1.29	3.83	1.62	0.17 *
47	園の方針と家庭のしつけとは明らかに区別し，けじめをつけて指導する	園の方針と家庭のしつけとをお互いに関係づけるようにつとめる	5.03	0.95	4.86	1.17	0.17 **
4	心身の鍛練は，はだか，すあし等の特別な方法で指導する	心身の鍛練は，遊び等，日常の保育活動の中で指導する	4.75	1.35	4.60	1.42	0.15
11	子供が独力でやりとげるように指導する	教師や友達にきがねなく助力を求めるように指導する	2.51	1.14	2.36	1.33	0.15 *
27	あらかじめ立てた時間の予定にそって指導する	予定を柔軟に変更し，子供の動きに合わせて指導する	4.23	1.34	4.08	1.47	0.15
35	ハーモニカ，笛など楽器の演奏がうまくできるように指導する	楽器の演奏よりも，音楽を楽しむように指導する	5.20	0.98	5.05	1.19	0.15 **
25	言葉や数よりも音感や情感を育てるように指導する	音感や情感よりも，言葉や数がわかるように指導する	2.52	1.00	2.50	1.26	0.02

表3　全体得点と個別得点との相関及び信頼性係数

尺度	No.	項目	全体 (1618)	公立保育園 (299)	公立幼稚園 (452)	私立保育園 (413)	私立幼稚園 (454)
「教師中心 ― 子ども中心」型	7	困難な時でも，子供が最後までねばり強くやりとげるように静かに見守ってほしい	.36	.30	.36	.44	.33
	8	時と場合によって，柔軟に指導の計画をかえてほしい	.21	.25	.13	.27	.20
	9	子供の短所よりも，長所をより伸ばすように指導してほしい	.14	.07	.11	.22	.14
	10	子供が独力でやりとげるように指導してほしい	.29	.28	.31	.25	.43
	11	造形などでは課題のテーマだけを決め後は子供の自発的活動にまかせてほしい	.44	.50	.43	.42	.31
	15*	子供がうまくやることよりも，一生懸命やることを重んじてほしい	.26	.28	.26	.21	.47
	16	造形では，子供の生みだす発想やイメージを第一に指導してほしい	.45	.47	.42	.45	.16
	22	間違った行動を直すには，その理由を言葉で子供にわかるまで説明してほしい	.14	.12	.13	.12	.33
	28	ケンカが起きた時は子供に解決をまかせてほしい	.28	.29	.26	.24	.33
	43	子供自身が遊びを考えたり，ルールを作ったりして遊ぶよう見守ってほしい	.35	.39	.36	.29	.36
			(.60)	(.64)	(.62)	(.63)	(.65)
「成果重視 ― 過程重視」型	1	ワークブックやドリルを使って指導してほしい	.51	.47	.57	.43	.51
	6	数の学習を教材を使って積極的にすすめてほしい	.63	.67	.66	.62	.54
	14	文字の学習を教材を使って積極的にすすめてほしい	.65	.70	.64	.65	.55
	21*	音感や情感よりも，言葉や数がわかるように指導してほしい	.38	.54	.39	.34	.24
	26	鉄棒，マットなどの運動がうまくできるように指導してほしい	.32	.39	.27	.27	.36
	30	ハーモニカ，笛など楽器の演奏がうまくできるように指導してほしい	.44	.51	.47	.34	.45
			(.74)	(.79)	(.76)	(.70)	(.71)
「まとまり重視 ― 個性尊重」型	12	多くの場面ですべての子供が同じ経験や活動をするように指導してほしい	.25	.25	.18	.31	.27
	13	一人一人の子供のペースよりもクラスのまとまりを大切にしてほしい	.30	.34	.24	.31	.32
	17	子供が互いに仲よく，助け合うように指導してほしい	.26	.45	.20	.23	.22
	20	まず子供が基本的な生活習慣をしっかりと身につけるように指導してほしい	.17	.31	.09	.20	.16
	32	子供の協調性を育ててほしい	.18	.16	.12	.17	.26
	42*	給食などでは，クラスが同じペースで残さずにきちんと食べるように指導してほしい	.25	.30	.16	.25	.30
			(.47)	(.57)	(.36)	(.49)	(.50)
「男女区別 ― 男女平等」型	3	男の子らしさ，女の子らしさを伸ばすように指導してほしい	.45	.41	.41	.47	.50
	33	男の子らしい遊び，女の子らしい遊びをさせるよう心がけてほしい	.47	.40	.43	.52	.52
	40	運動，整理整頓，言葉づかいなどでは子供の性別に合った指導をしてほしい	.35	.31	.34	.34	.43
			(.61)	(.56)	(.59)	(.64)	(.67)

・思いやり，やさしさを身につける

などの，基本的な社会性を学ぶ場を保育に期待していると考えられる。

これらの傾向はあくまでも保育者と母親との間の相対的な差異であるが，母親の保育に対する見方を明らかにする上で，示唆的な特徴であると思われる。

2．尺度構成と内容整合性

保育者の「個人レベルの指導論」の研究（梶田他，前出）において，指導論の4つの尺度が得られたが，今回もほぼ同様の調査項目を用いて，保育に対する母親の考え方，保育者への期待を探ろうとしている。その際，保育者の調査結果と直接に比較検討することも，本研究の1つのねらいとなっている。

そこで，保育者の「個人レベルの指導論」を検討した尺度を参考にして，同じ内容の項目を構成項目とする4つの尺度をつくった。これらは前回同様，次のように命名された。

第1尺度　「教師中心―子ども中心」型

第2尺度　「成果重視―過程重視」型

第3尺度　「まとまり重視―個性尊重」型

第4尺度　「男女区別―男女平等」型

これらの尺度の内的整合性と信頼性を検討するため，全体項目得点と個別得点との相関係数，および信頼性係数（Cronbach's α）を，被調査者全体，および，公立保育園，公立幼稚園，私立保育園，私立幼稚園の別に求めた。表3にその結果を示している。

表から明らかなように，相関係数は，.70から .07までの範囲の値をとっている。Cronbach のα係数は，.79から .36の範囲にあり，第3尺度で一部低い値もあるが，おおむね，信頼できる尺度が構成されたといえよう。

3．尺度別平均値と尺度間相関

各項目の得点を尺度ごとに合計して，個人別平均値を算出した。先にも述べたように，得点1はAの意見，得点6はBの意見に近く，3.50が中点である。従ってそれぞれの尺度において，得点が高いほど，各尺度の右側の意見，すなわち「子ども中心」，「過程重視」，「個性尊重」，「男女平等」の指導を期待する傾向が，相対的に強くなることを示している。

このようにして求められた尺度別平均値，および得点分布を図1に示した。尺度の分布を見てみよう。

「教師中心―子ども中心」型尺度の分布は，3から6の間に平均値4.90を頂点として分布しており，全体に子ども中心の指導を期待する傾向が強いが，極端な子ども中心ではないといえよう。

「成果重視―過程重視」型尺度の分布を見ると，1点から6点へと得点が高くなるにつれて徐々に人数が増加している。特に，4から6に得点が集中しており，過程重視に偏っている。

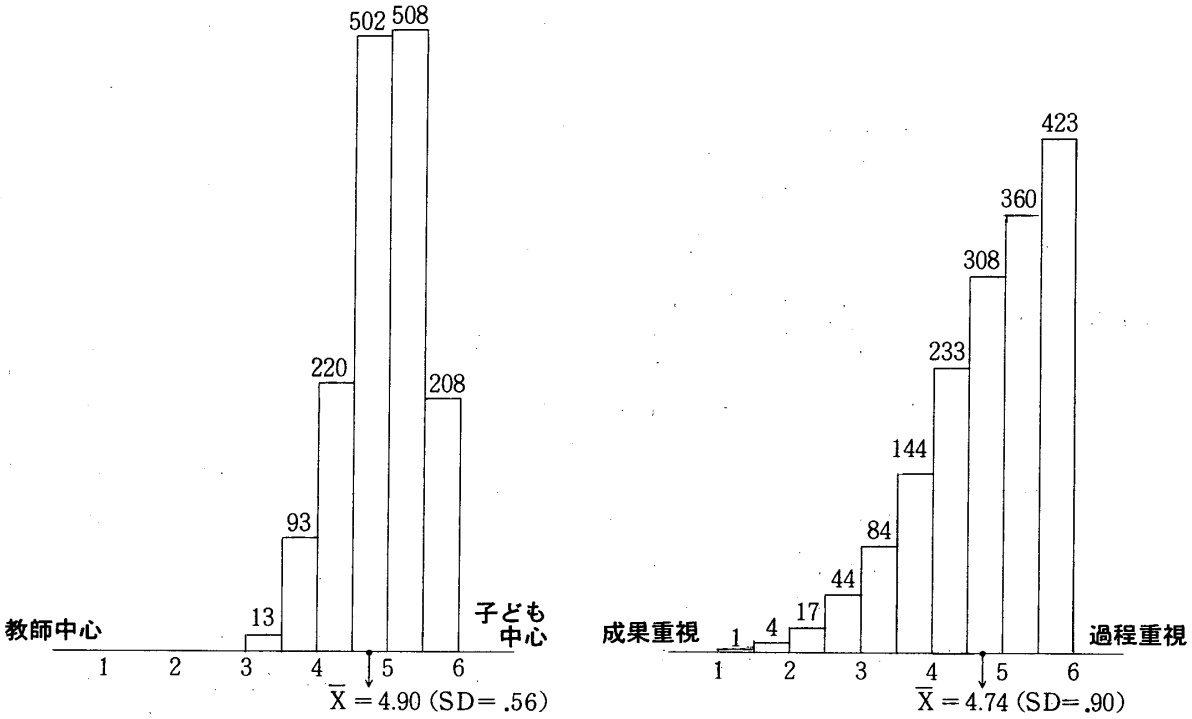

図1　尺度別にみた得点の分布

「まとまり重視―個性尊重」型尺度は，平均値2.93を中心に1から6の範囲に，正規分布に近い形で分布している。一方，「男女区別―男女平等」型尺度は，平均値4.40を中心に1から6の範囲に分布している。特に，3から6の間での分布が多く，男女平等の指導への母親の期待の強さには，その程度においてはばがあることがみてとれる。

図1から明らかなとおり，平均的な母親は，子ども中心，過程重視，男女平等の指導を，保育者に期待しているといえよう。なお，第3の尺度「まとまり重視―個性尊重」型については，どちらかといえばまとまり重視に偏ってはいるが，それ程目立った支持とはいえないようである。

一方，4つの尺度の相関関係を示したのが表4である。これによると，「教師中心―子ども中心」型尺度と「成果重視―過程重視」型尺度，「教師中心―子ども中心」型尺度と「まとまり重視―個性尊重」型尺度，「教師中心―子ども中心」型尺度と「男女区別―男女平等」型尺度，「成果重視―過程重視」型尺度と「まとまり重視―個性尊重」型尺度，「成果重視―過程尊重」型尺度と「男女区別―男女平等」型尺度，「まとまり重視―個性尊重」型尺度と「男女区別―男女平等」型尺度，の間に，それぞれ，有意な正の相関がみられた。

これらの結果から，4つの尺度は全て，互いに関連づけて受けとめられているといえよう。

4．下位群間の尺度別平均値の比較

3では被調査者全体の尺度別平均値について述べたが，

表4　尺度間相関

尺　　度	「教師中心―子ども中心」型	「成果重視―過程重視」型	「まとまり重視―個性尊重」型	「男女区別―男女平等」型
「教師中心―子ども中心」型				
「成果重視―過程重視」型	.29 **			
「まとまり重視―個性尊重」型	.08 **	.08 **		
「男女区別―男女平等」型	.21 **	.22 **	.08 **	

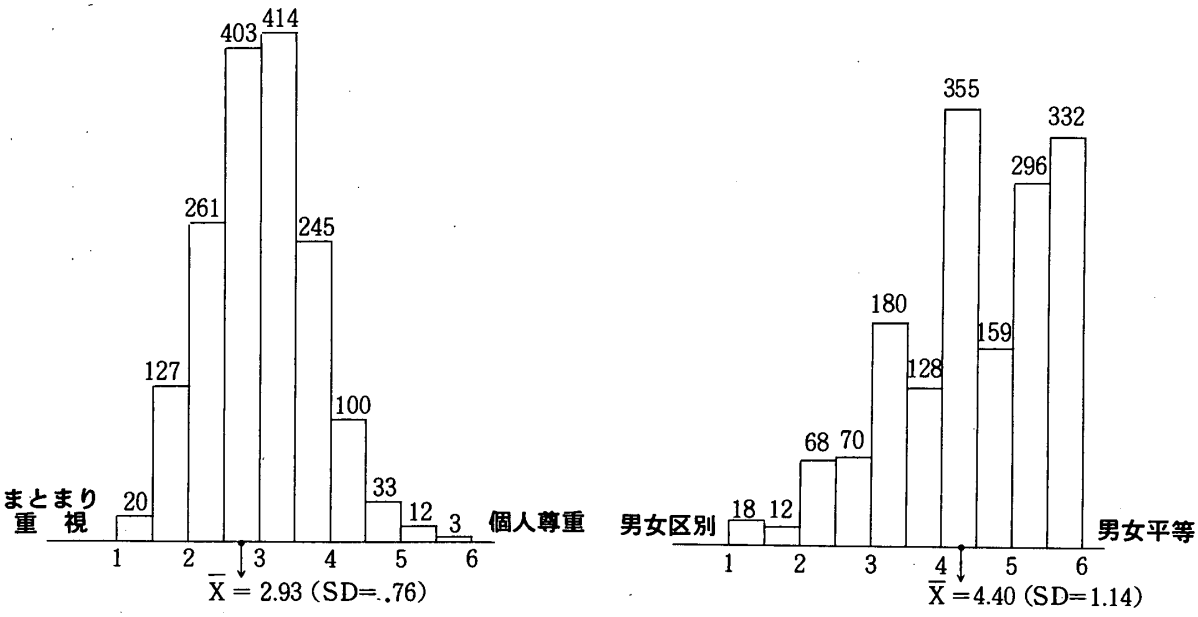

図1（つづき）

表5　設置者別保育園・幼稚園の母親の尺度別平均値と標準偏差

尺度＼群（N）	全体（1618）	公立保育園（299）	公立幼稚園（452）	私立保育園（413）	私立幼稚園（454）	F一値
「教師中心―子ども中心」型	4.90（.56）	4.91（.56）	4.92（.54）	4.80（.58）	4.95（.54）	6.388***
「成果重視―過程重視」型	4.74（.90）	4.88（.96）	5.02（.83）	4.50（.89）	4.60（.85）	32.510***
「まとまり重視―個性尊重」型	2.93（.76）	2.87（.82）	2.99（.70）	2.86（.75）	2.96（.76）	2.975*
「男女区別―男女平等」型	4.40（1.14）	4.55（1.12）	4.45（1.10）	4.35（1.15）	4.29（1.17）	3.781*

ここでは，設置者別保育園，幼稚園の群に分けて尺度別平均値を比較する。

表5は，公立保育園，公立幼稚園，私立保育園，私立幼稚園のそれぞれに子どもを通園させている母親の4群における尺度別平均値，および標準偏差を示している。各尺度ごとに，1要因の分散分析をしたところ，すべての尺度において有意差が見られた。

「教師中心―子ども中心」型尺度では，私立保育園の母親群が他の群より低い平均値を示している。私立保育園の母親が，最も，子ども中心の指導への期待が小さいといえるだろう。「成果重視―過程重視」型の尺度の結果からは，公立幼稚園，公立保育園の母親の群の平均値が，私立幼稚園群，私立保育園群よりも高く，とくに，公立幼稚園群においてその傾向が顕著であることが示された。

つまり，過程重視の指導を期待する母親は，子どもを公立に入れている場合の方が多いことを示唆している。

「まとまり重視―個性尊重」型尺度の結果をみると，公立および私立の幼稚園の母親の群の方が平均値が高く，まとまり重視の指導への期待が小さいことを伺わせる。

「男女区別―男女平等」型尺度の結果からは，公立保育園群が私立保育園，私立幼稚園群よりも，男女平等の指導をより強く，保育者に期待していることが示唆された。

このように，子どもの所属する園によって，母親の保育者への期待が異なるのはどのような背景からであろうか。母親があらかじめ特定の考えを持ってそれぞれの園を選択するという場合や，各園の保育や保育者と接するなかで母親の保育に対する考えが形成される場合，あるいはこの両者が相互に影響し合って現時点の考えが決まる場合，の少なくとも三通りの背景が考えられる。今回の調査では，この背景を探るには資料が不足しているが，前回行った，保育者の考え方と対応させることによって，母親と保育者の考え方の関連についてはある程度，見通しをもつことができると思われる。この点については，後の節に詳述する。

5．母親の期待する指導のパターンの分析

4つの尺度についての得点が，それぞれ1から6のスケールのどの位置にあるかによって，各被調査者の反応パターンを求め，母親個人のもつ保育への見方，期待を構造的に明らかにすることができる。

パターンを得るために以下のような手続きをとった。評定得点1から6までを等しく2分割して，各項目に対する評定を各尺度ごとに2区間にあてはめた。評定得点は1から3.500までを区間①に，評定得点3.501から6までを区間②にあてはめた。反応のパターンは，理論的には16種類（2^4）の出現が可能であるが，実際には14通り出現した。表6にその出現率を示した。

全体の結果によれば，最も出現率の高いのは，「子ども中心―過程重視―まとまり重視―男女平等」型のパターンである。56.9%の母親がこのような指導を期待している。ついで割合の高いのは，「子ども中心―過程重視―まとまり重視―男女区別」型（15.3%），つぎが「子ども中心―過程重視―個性尊重―男女区別」型（12.9%），「子ども中心―成果重視―まとまり重視―男女平等」型（6.3%）となっている。これら4つのパターンで全体の91.4%を占め，残りの10パターンはいずれも5%以下である。

つぎに，表6にもとづいて，公立保育園，公立幼稚園，私立保育園，私立幼稚園の母親の4群についてパターンの出現率を調べてみると，4群とも11ないし12パターン出現しており，出現数に違いは見られない。

ただし各群での代表的パターンを見ると公立と私立ではその特徴に違いが見られる。公立の保育園と幼稚園の母親群においては，「子ども中心―過程重視―まとまり重視―男女平等」型，「子ども中心―過程重視―まとまり重視―男女区別」型，「子ども中心―過程重視―個性尊

表6　指導への期待パターンの出現数および出現率（%）

下位尺度と区間				全体 (1618)	公立		私立	
「教師中心—子ども中心」	「成果重視—過程重視」	「まとまり重視—個性尊重」	「男女区別—男女平等」		保育園 (299)	幼稚園 (452)	保育園 (413)	幼稚園 (454)
②	②	①	②	921 (56.9)	191 (63.9)	275 (60.8)	219 (53.0)	236 (52.0)
②	②	①	①	248 (15.3)	34 (11.4)	68 (15.0)	68 (16.5)	78 (17.2)
②	②	②	②	209 (12.9)	40 (13.4)	61 (13.5)	48 (11.6)	60 (13.2)
②	①	①	②	102 (6.3)	14 (4.7)	15 (3.3)	34 (8.2)	39 (8.6)
②	①	①	①	51 (3.2)	5 (1.7)	8 (1.8)	24 (5.8)	14 (3.1)
②	②	②	①	38 (2.3)	5 (1.7)	11 (2.4)	3 (0.7)	19 (4.2)
②	①	②	②	18 (1.1)	5 (1.7)	4 (0.9)	6 (1.5)	3 (0.7)
①	②	①	②	13 (0.8)	0 (—)	5 (1.1)	7 (1.7)	1 (0.2)
②	①	②	①	7 (0.4)	1 (0.3)	3 (0.7)	1 (0.2)	2 (0.4)
①	②	②	②	3 (0.2)	0 (—)	1 (0.2)	1 (0.2)	1 (0.2)
①	①	①	②	3 (0.2)	2 (0.6)	0 (—)	1 (0.2)	0 (—)
①	①	①	①	3 (0.2)	1 (0.3)	1 (0.2)	0 (—)	1 (0.2)
①	①	②	①	1 (0.1)	1 (0.3)	0 (—)	0 (—)	0 (—)
①	②	①	①	1 (0.1)	0 (—)	0 (—)	1 (0.2)	0 (—)

重—男女平等」型の3つのパターンでそれぞれ全体の88.7%（保育園），と89.3%（幼稚園）を占めており，公立園の母親がこの3つのパターンに集中しているといえよう。

次に，私立の保育園と幼稚園の母親群をみてみよう。保育園では，上記の3つのパターン以外に，「子ども中心—成果重視—まとまり重視—男女平等」型（8.2%），「子ども中心—成果重視—まとまり重視—男女区別」型（5.8%）のパターンの母親が5%以上存在している。また，幼稚園では，公立のところで述べた3パターン以外に，「子ども中心—成果重視—まとまり重視—男女平等」型が8.6%を占めている。

母親の保育への期待のパターンの，公立と私立の比較をまとめると以下のようになるだろう。

まず公立園群では，5%以上の母親が反応したパターンが3パターンであったのに対して，私立園群の場合は，4ないし5パターンあり，相対的に私立の母親の指導への期待の方がはばが広いと考えられる。

また，私立園では，成果重視を含むパターンが保育園においても幼稚園においても見られるところに，今一つの特徴があるといえるだろう。

6．代表的な園における母親の期待パターン

保育活動に対する母親の期待は，園の種別によってかなり異なることが明らかにされた。しかし，このような結果は，複数の園から資料を得ているので，園の種別にもとづいてすべてを解釈することは適当ではない。むしろ，個々の園の母親の期待パターンを明らかにすることが必要となる。また，個々の保育者の指導についての見方と母親の期待との比較からも興味ある知見が示されるだろう。

そこでつぎに，梶田他（1985）でとり上げた代表的な4つの園の母親の資料を分析し，園ごとにみた母親の期待パターンの特徴を記述する。またあわせて，梶田他（1985）で得られた保育者のＰＴＴのパターンとの比較も試みる。分析の対象となった母親は，表1に示したＡ－1（以下，公立Ａ保育園とする），Ｂ－1（公立Ｂ幼稚園），Ｃ－1（私立Ｃ保育園），Ｄ－1（私立Ｄ幼稚園）の4園の母親である。

4つの園で出現した母親の期待パターンと保育者のＰＴＴのパターンの内訳と出現率を示したものが表7である。以下，表7にもとづいてそれぞれの園の結果の特徴を記述する。

表7　母親の期待パターンおよび保育者のPTTのパターンの代表的園における出現数および出現率（%）

下位尺度と区間				公立A保育園		公立B幼稚園		私立C保育園		私立D保育園	
「教師中心—子ども中心」	「成果重視—過程重視」	「まとまり重視—個性尊重」	「男女区別—男女平等」	母親（76）	保育者（37）	母親（204）	保育者（12）	母親（83）	保育者（16）	母親（138）	保育者（16）
②	②	①	②	57 (75.0)	18 (48.6)	125 (61.3)	6 (50.0)	53 (63.9)	6 (37.5)	68 (49.3)	3 (18.8)
②	②	①	①	6 (7.9)	6 (16.2)	28 (13.7)	1 (8.4)	17 (20.5)	8 (50.0)	25 (18.1)	3 (18.8)
②	②	②	②	9 (11.8)	6 (16.2)	23 (11.3)	5 (41.6)	6 (7.2)	2 (12.5)	9 (6.5)	1 (6.3)
②	①	①	②	0 (—)	2 (5.4)	8 (3.9)	0 (—)	3 (3.6)	0 (—)	17 (12.3)	5 (31.2)
②	①	①	①	1 (1.3)	2 (5.4)	4 (2.0)	0 (—)	2 (2.4)	0 (—)	11 (8.0)	4 (25.0)
②	②	②	①	1 (1.3)	1 (2.7)	5 (2.5)	0 (—)	0 (—)	0 (—)	6 (4.3)	0 (—)
②	①	②	②	1 (1.3)	0 (—)	4 (2.0)	0 (—)	1 (1.2)	0 (—)	0 (—)	0 (—)
①	②	①	②	0 (—)	0 (—)	3 (1.5)	0 (—)	0 (—)	0 (—)	0 (—)	0 (—)
②	①	②	①	0 (—)	0 (—)	2 (1.0)	0 (—)	0 (—)	0 (—)	1 (0.7)	0 (—)
①	①	①	②	0 (—)	2 (5.4)	0 (—)	0 (—)	0 (—)	0 (—)	0 (—)	0 (—)
①	②	②	②	0 (—)	0 (—)	1 (0.5)	0 (—)	1 (1.2)	0 (—)	1 (0.7)	0 (—)
①	①	①	①	1 (1.3)	0 (—)	1 (0.5)	0 (—)	0 (—)	0 (—)	0 (—)	0 (—)

1）公立A保育園の母親のパターン

表7から明らかなように，A保育園では7つのパターンが出現しているが，最も出現率の高いパターンは，「子ども中心—過程重視—まとまり重視—男女平等」型で全体の75.0%を占めている。ついで「子ども中心—過程重視—個性尊重—男女平等」型（11.8%）と「子ども中心—過程重視—まとまり重視—男女区別」型（7.9%）の出現率が高い。これら3つのパターンで94.7%になっている。この傾向は，表7に示した保育者のＰＴＴのパターンと著しく異なるものではないが，全体としては「子ども中心—過程重視—まとまり重視—男女平等」型に集中していることが特徴的である。つまり，A保育園では，保育者のＰＴＴのパターンはかなり多様であるのに対して，母親が保育活動に期待する内容のパターンはある程度共通している。そして，とくに「男女区別—男女平等」型尺度では86.8%の者が男女平等に属しており，この点がA保育園における母親の意識の特徴である。

全体の結果として，母親の期待の内容は，かなり典型的なパターンによって構成されているのに対して，保育者のＰＴＴのパターンが多様であることに特色がある。

2）公立B幼稚園の母親のパターン

表7から明らかなように，B幼稚園では11のパターンが出現した。最も出現率の高いパターンは「子ども中心—過程重視—まとまり重視—男女平等」型であり，全体の61.3%を占めている。ついで「子ども中心—過程重視—まとまり重視—男女区別」型（13.7%），「子ども中心—過程重視—個性尊重—男女平等」型（11.3%）となっている。これら3つのパターンをあわせると，86.3%になる。残りの8つのパターンはいずれも5%以下であるが，これらの出現パターンの中には，成果重視，男女区別型も含まれている。この点はB幼稚園の母親の保育活動に対する期待の特徴であるといえよう。とくにこの結果をB幼稚園の保育者のＰＴＴのパターンと比較する場合に興味ある知見を示してくれるだろう。

表7にしたがって，B幼稚園における保育者のＰＴＴのパターンをみてみよう。ここでは，3つのパターンが出現したにすぎない。しかも，子ども中心，過程重視，男女平等という点で明瞭である。こうした出現パターン数のちがいは，日常の保育活動についての母親の理解，あるいは，母親側の期待と保育者の考え方との調整が必要になることを示唆している。

公立B幼稚園における母親の期待パターンの出現数と保育者のＰＴＴのパターンの出現数の傾向が，公立A保育園と対照的であることも興味深い。

3）私立C保育園の母親のパターン

C保育園の母親のパターンは7つ出現した。表7に示したように，最も出現率の高かったのは，「子ども中心—過程重視—まとまり重視—男女平等」型であり，全体の63.9%になる。ついで高いのが，「子ども中心—過程重視—まとまり重視—男女区別」型（20.5%），「子ども中

心―過程重視―個性尊重―男女平等」型（7.2％）である。これら３つのパターンをあわせると91.6％である。C保育園の母親のパターンの特徴をあげると，成果重視型を含むパターンが7.2％出現していること，男女平等型を含むパターンが67.1％を占めることなどである。

一方，保育者のＰＴＴのパターンは，表７から明らかなように，３つ出現しただけであった。しかもそれらは，過程重視型を含むものに限られている。また，母親の場合とは異なり，「男女区別―男女平等」型尺度では男女区別型を含むパターンと男女平等型を含むパターンが50％ずつになっている点もC保育園の保育者のパターンの特徴である。

４）私立D幼稚園の母親のパターン

D幼稚園の母親のパターンは，表７に示したように全部で８つである。最も出現率の高いパターンは，「子ども中心―過程重視―まとまり重視―男女平等」型であり，49.3％を占めている。ついで高いのが「子ども中心―過程重視―まとまり重視―男女区別」型（18.1％）と「子ども中心―成果重視―まとまり重視―男女平等」型（12.3％）である。この３つのパターンをあわせると79.7％に達する。このほか「子ども中心―成果重視―まとまり重視―男女区別」型が8.0％，「子ども中心―過程重視―個性尊重―男女平等」型が6.5％となっている。このように，「成果重視―まとまり重視」型を含むパターンの出現率が高いことがD幼稚園の母親の期待パターンの特徴である。表７から明らかなように，「過程重視―まとまり重視」型を含むパターンは全体で20.3％を占めている。こうした傾向は，これまで述べてきた３つの園とはかなり異なっている。この点については，D幼稚園の保育の目標と関連づけて考えるべきであろう。すなわち，母親たちは，D幼稚園が保育の目標および運営方針として，知性と創造性の伸長を大切にし，知性，創造教育についてさまざまな研究を試みていること，さらには，一斉保育の中で専任講師による言葉リズム，体育，英会話，水泳などの指導も行っていることを十分承知している。それよりも母親たちは，自分たちの期待が園の方針と合うからこそ，D幼稚園へ子どもを通わせているのであろう。

一方，D幼稚園の保育者のＰＴＴのパターンにはどのような特徴がみられるのであろうか。表７にみるように，保育者の場合にも，「成果重視―まとまり重視」型を含むパターンが56.2％に達しており，D幼稚園の保育の目標や運営方針と関連していると思われる。ただ，保育者の場合には，「成果重視―まとまり重視」型を含むパターンが過半数を占めているのに対して，母親の場合にはあくまでも，「過程重視―まとまり重視」型を含むパターンが中心であることは，両者の大きなちがいである。つまり，保育者のＰＴＴのパターンでは，成果を重視するとともにクラス全体をまとめるという視点が強いのに対して，母親の期待パターンは，個人個人の活動の過程を重視しつつ全体をまとめてほしいと考えているのである。

以上の４つの園の母親のパターンは，保育者のＰＴＴのパターンよりも多く出現している。しかし，もともと保育者の対象数が１園あたり12名から37名であり，母親の対象数に比べて著しく少ない。したがって，母親の期待パターンが多様であることは指摘できても，保育者のＰＴＴのパターンの出現数よりも必ずしも多いとはいえないだろう。この点が，個々の園の特徴を明らかにする場合の問題点となろうが，いずれにしても，各園での母親の期待の内容と保育者のＰＴＴのパターンとが必ずしも一致していないことが示されたのである。

Ⅳ　討　　論

１．母親の期待と保育者のPTT

本研究は，保育者の持つ「個人レベルの指導論（Personal Teaching Theoy＝PTT)」（梶田他，1985）の研究方法と結果に依拠して，母親のもっていると思われる，保育や指導（特に自分の子どもの所属する園の保育者の保育や指導）に対する期待を，構造的に明らかにすることを目的とした。この母親の保育や指導に対する期待の構造は，前述のごとくある程度，明らかにすることができた。

そこで次の問題として，これらの期待が，保育者の指導とどのように関連するのかを見ていく必要がある。我々はこれまで，保育者の指導を，ＰＴＴという観点から捉えてきており，保育者が種々なＰＴＴに基づいて指導を行っていることを明らかにした。従って，ここでは，保育者のもつＰＴＴの資料（梶田他，1985）と母親の期待の資料を直接的に比較検討してみたい。

①　尺度別平均値から見た両者の違い

保育者の尺度別平均値（梶田他，1985）を再録し，母親の期待と比較したのが表８である。

母親と保育者は，各尺度のどちらに偏るかといった，指導の基本的方針においては一致しているようである。すなわち，第１尺度は，子ども中心，第２尺度は過程重視，第３尺度はどちらともいえず，第４尺度は男女平等の意見を，母親も保育者も支持しているといえよう。

しかし，それぞれの尺度の左右の意見に対する支持の程度は，両者で異なるところがある。表から明らかなように，ｔ－検定によると，母親と保育者の尺度別平均値は，第２尺度を除いて有意差がみられた。第１尺度では，母

表8　母親と保育者の尺度別平均値と標準偏差

尺度＼群(N)	母親 (1618)	保育者 (395)	検定結果
「教師中心―子ども中心」型	4.90 (.56)	4.61 (.54)	**
「成果重視―過程重視」型	4.74 (.90)	4.67 (.75)	
「まとまり重視―個性尊重」型	2.93 (.75)	3.12 (.71)	*
「男女区別―男女平等」型	4.40 (1.14)	4.25 (.78)	**

親の方がより子ども中心の指導を期待し，第4尺度では母親の方がより男女平等の指導を期待しているということができよう。

第3尺度では，両者ともどちらの意見にも偏らないがどちらかといえば，母親の方がまとまり重視に近い指導を期待していると考えられる。

このような尺度別平均値の両者の違いは，どのような背景から生まれるのであろうか。

1つには，保育や指導というものが母親にとっては他者の行為であり，しかも子どもを通しての間接的な事象であるので，より理想化された望ましさが，項目への反応に反映されたことが挙げられよう。逆に言えば，保育者にとっては，現実の指導方法が問われているわけであり，より現実的な感覚で問題が処理され，意見の左右への偏りの巾が小さくなっていると思われる。

しかし，一方では，このような母親と保育者の立場の違いを超えて，両者が基本的に類似の傾向をもつことは興味深い問題である。つまり，母親の期待と保育者のPTTの関連を示唆しているからである。今回は資料収集の不手際から，母親群を年齢別や子どもの在園年数別に分けることができなかったが，これらの群分けによって母親の期待と保育者のPTTを比較検討することによって，母親の期待の形成過程や保育者のPTTとの関連性を明確にしていくことができるだろう。

② 項目得点の分布から見た両者の違い

両者の項目得点の分布が異なるのは，第2尺度と第4尺度である。

図1に示すように，母親の場合の第2尺度の分布は，得点が6に近づくにつれて徐々に人数が増えているが，保育者の場合（梶田他，1985，p85図1），得点4，5まで人数が増えるが，得点5.501から6までの人はそれまでの約3分の1である。つまり，母親の方が極端な右寄り，過程重視の意見の人が多いということになろう。

第4尺度の分布も，母親の場合，特に得点4，5，6に偏っており，保育者の分布が平均点を中心に徐々に減少している傾向とは異なっている。つまり，母親の中には極端な男女平等の指導を期待する人の割合が多いということである。

このように，得点分布においても，母親の期待が，やや理想主義的な傾向をもっていることが伺われる。

③ 反応パターンによる両者の違い

反応パターン（母親の場合は期待のパターン）の出現率の母親と保育者の比較を試みたのが表9である。

表によると，母親の期待のパターンと保育者のパター

表9　母親と保育者の反応パターンの出現率の比較（%）

下位尺度と区間				全体	公立保育園	公立幼稚園	私立保育園	私立幼稚園
「教師中心―子ども中心」型	「成果重視―過程重視」型	「まとまり重視―個性尊重」型	「男女区別―男女平等」型	1618 (395)	299 (145)	452 (61)	413 (71)	454 (118)*
②	②	①	②	56.9 (46.6)	63.9 (46.9)	60.8 (44.3)	53.0 (49.3)	52.0 (45.8)
②	②	①	①	15.3 (15.9)	11.4 (12.4)	15.0 (13.1)	16.5 (25.4)	17.2 (16.1)
②	②	②	②	12.9 (25.1)	13.4 (31.7)	13.5 (37.7)	11.6 (9.9)	13.2 (19.5)
②	①	①	②	6.3 (3.5)	4.7 (2.1)	3.3 (0.0)	8.2 (4.2)	8.6 (6.8)
②	①	①	①	3.2 (3.0)	1.7 (2.1)	1.8 (0.0)	5.8 (5.6)	3.1 (4.2)
②	②	②	①	2.3 (3.0)	1.7 (2.8)	2.4 (4.9)	0.7 (5.6)	4.2 (0.8)
その他				3.1 (0.3)	3.2 (2.0)	3.2 (0.0)	5.2 (0.0)	1.7 (6.8)
計				100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

*（　）内は，すべて保育者における数値を示す。

ンの間には次のような共通点がある。すなわち，最も出現率の高いのは，両者とも「子ども中心―過程重視―まとまり重視―男女平等」型であることである。

一方，以下に指摘するような違いも見られる。

まず，第1位のパターンを示す人の割合が母親群の方が多く，公立保育園，公立幼稚園でその差が顕著である。次に，母親の方では第3位のパターン「子ども中心―過程重視―個性尊重―男女平等」型が，保育者群では第2位で母親群の2倍（25.1%）の割合であることが挙げられる。さらに，下位群の出現率の傾向も母親と保育者では異なった傾向が見られた。

また，表中には示されていないが，理論的出現数16通りのうち，母親群では14通り，保育者群では11通り出現していることも1つの違いと言えるかもしれない。しかし，母親群は圧倒的に人数が多い（1618名）ことを考えると出現実数を直接的に比較することは問題が残る。

反応パターンの違いを全体的に見ると，母親群の方が相対的に特定のパターンに集中する程度が強く，公立園の母親においてそれが目立つことである。このように多くの人が同一の考えをもつのは，幼児教育専攻の学生を対象とした調査（梶田他，1984）においても認められた。この場合，学生にとっての理想の保育や指導は，経験や知識の不足から類似したものになりやすいことが指摘されたが，母親の場合はどうであろうか。母親の場合は，学生よりも保育についてだけでも複雑な経験と見識を持っているので，学生と同列に見做すことはできないだろう。これらの問題の背景を明らかにするには，母親の保育に対する見方，期待の形成過程や変化について克明に検討する必要があり，母親群の年齢や経験の内容別，子どもの保育園，幼稚園の在園期間別の群分けなどの手続きを用いた研究が今後の課題の1つである。

2．今後の課題

本研究は，保育園や幼稚園に子どもを通わせている母親が日常の保育活動に何を期待しているかを明らかにしようとして行われた。その結果は，保育者のもっている個人レベルの指導論（PTT）と比較され，さらに，代表的な園を選びその園の母親の期待と保育者のPTTとが比較された。

母親の期待は，保育者のPTTに比べて多くのパターンが出現した。また，代表的な園における両者のパターンを比較してみると，明らかに異なった傾向を示す場合があり，母親が保育に期待する内容の多様性を裏付けている。このことは，母親の調査対象数が保育者のそれに比べてはるかに多いことと関係がある。調査対象数が多くなれば出現パターンが増加することは当然である。しかし，多様なパターンが出現する原因はそれだけでなく，母親と保育者とで，回答の枠組にちがいがあることの方が重要なのではないだろうか。母親は，自分の子どもについてどう保育してほしいかということを表明しているわけであるが，それに対する保育者は，該当する年齢のクラスの子ども全体を考えた一般的な指導のあり方について回答していると思われる。したがって，母親も保育者も保育活動に対する個人的な見方を回答していることにちがいないが，母親はある1人の子どもの様子を念頭におきながら個人的な考え方を回答しただろう。それに対して，保育者は子ども全体（あるいは最も平均的な子ども）についての個人的な考え方を述べている。ここに，母親と保育者の出現パターン数のちがいの原因があると思われる。

われわれは，保育者のPTTを明らかにすることを第1段階として（梶田他，1985），つぎに母親の保育活動に対する期待の内容を明らかにした。しかし，上で指摘したように，保育者が個々の子どもにどのようにかかわるかという問題に取り組むことになると，本研究で用いたような一般論のかたちで質問を行うことは適切ではない。そこでわれわれは，具体的な場面で特徴的な行動を示す子どもを1人とり上げ，その子どものイメージをもとにして，どのような指導のしかたが考えられるのかをPTTの枠組でとらえることが可能かどうかの検討をはじめている。この試みが可能になれば，1人1人の子どもに異なる対応のしかたをしている保育者の基本的パターンと多様性を一層明確にすることができるであろう。

文　　献

東　洋・柏木恵子・Hess, R. D. 1981　母親の態度・行動と子どもの知的発達――日米比較研究――東京大学出版会

梶田正巳　1986　授業を支える学習指導論――PLATT――　金子書房

梶田正巳・後藤宗理・吉田直子　1984　幼児教育専攻学生の「個人レベルの指導論」の研究　名古屋大学教育学部紀要（教育心理学科）**31**，95-112.

梶田正巳・後藤宗理・吉田直子　1985　保育者の「個人レベルの指導論（PTT）」の研究――幼稚園と保育園の特徴――名古屋大学教育学部紀要（教育心理学科）**32**，173-200.

粂　幸男他　1985　保育の諸条件に関する基礎的研究（その1）――『保育者に関する調査』研究――名古屋市立保育短期大学研究所紀要，**22**，38－91.

粂　幸男・丹羽　孝・後藤宗理・田中俊也　1986　保育者の基本的資質に関する研究――母親・保育者・養成校教員からみた望ましい保育者像――保母養成研究年報，2・3，1-15.
竹内通夫　1981　現代幼児教育論史　名古屋：風媒社

（1986年7月31日　受稿）

ABSTRACT

MATERNAL EXPECTATION TO CARING ACTIVITIES OF TEACHER IN KINDERGARTEN AND NURSERY SCHOOL – AN EXTENSION OF "PERSONAL TEACHING THEORY"

Masami KAJITA, Motomichi GOTO, & Naoko YOSHIDA

This study aimed at clarifying mother's expectation to caring activities in early education facilities. The survey was conducted to 1618 mothers who sent their children to Kindergarten and nursery school. The inventory data of mothers we replaced on the scales of previous study (KAJITA, GOTO & YOSHIDA, 1985) and were depicted as a profiles. These profiles were compared and analized in terms of "Personal Teaching Theory" (PTT for short)